

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870402

研究課題名(和文) 高等教育におけるアクセシビリティ支援の人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological study of accessibility support in higher education

研究代表者

岡田 菜穂子(山本菜穂子)(OKADA, Nahoko)

山口大学・大学教育機構・講師

研究者番号：90547142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の大学における障害のある学生の支援現場に注目し、アクターネットワーク理論をヒントに、アクセシビリティ支援の仕組みを明らかにすることを目的とした。具体的には、複数大学での調査をもとに、主に人的支援に関して、支援に関わる要素をアクターとして捉え、アクター間の繋がりを分析するとともに、支援方法ごとのアクターの重要性について考察を加えた。成果として、見落とされがちなアクターの重要性と、一見人に頼らざるを得ない支援方法を見直す可能性を指摘した。また、アクターの確保が難しい場合に、アクターの代替が行われており、このことが柔軟な支援方法の形成に繋がっていることを示した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I will focus on the support center for students with disabilities at Japanese universities, and explain the mechanism of accessibility support using actor network theory as a base. Based on research on human support at several universities, I treat elements related to accessibility support as actors, analyze the relation between actors, and compare the importance of different actors in each support method. My results show that the necessity of certain support dependent on people should be reviewed, and emphasized the importance of some often overlooked actors. I also found that a more flexible support method can be formed by seeking out substitute actors to take the place of difficult-secure actors.

研究分野：アクセシビリティ研究、文化人類学

キーワード：高等教育 障害学生 アクセシビリティ支援 アクターネットワーク

1. 研究開始当初の背景

障害への配慮の標準化を求めるグローバルな流れを受け、日本においては平成 28 年度から「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行された。大学では障害のある学生（以下、障害学生への対応や「合理的配慮 (reasonable accommodation)」の実施が求められているが、具体的なアクセシビリティ支援の実践方法については高等教育現場にゆだねられている状況にある。

日本の高等教育機関における障害学生の在籍率は増加傾向にあるが、障害学生のニーズは極めて少数かつ多様で不可避であるため、対応はマイノリティ支援に留まりがちである。また、大学での障害学生支援の標準化が進みつつあるものの、支援体制や組織の整備状況については質的・量的な格差が生じておられる。さらに ICT の進化や新たな法整備の動きを受け、近年の高等教育での障害学生支援は転換期を迎えている。

このような背景をもつ日本の高等教育における障害や配慮といった事象に関して、文化的社会的側面からの調査・研究はほとんどなされてこなかった。様々な課題があるとされつつ高等教育の現場では日々、ニーズのある学生への支援が実践されている。その支援の実践プロセスにおける工夫や支援に関するコンフリクトへの折り合いの付け方に目を向け、現状を整理分析することは、学問的に意義があるだけでなく、より効果的な支援を実施していくために有効であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学での障害学生支援現場をフィールドに、人類学的な視点からアクセシビリティ支援の仕組みを明らかにすることである。

近年、開発援助や事業マネジメントのプロセスや仕組みの解明に貢献しているものに、ラトゥールらが提唱したアクターネットワーク理論 [ラトゥール 1999 他] がある。アクターネットワーク理論は、近代的な二分法を批判し、人だけでなくモノや情報、制度等を同等のアクターとして位置づけ、アクターの関係性を読み解くことで現象の仕組みや構造を明らかにしようとするものである。

本研究では、アクターネットワーク理論をヒントに、障害学生修学支援に関わる要素をアクターとして捉え、人(障害学生・支援者)やモノ(支援機器) 制度といったアクターがいかに組み合わせられて支援の実施に至るのかに注目する。具体的には、高等教育におけるアクセシビリティ支援に関するアクター間の関係性と支援の実効性に関する議論を行った。

3. 研究の方法

本研究では、関連文献資料調査、複数大学の障害学生支援現場での現地調査、支援担当

者へのインタビューを行った。

現地調査のフィールドとして、障害学生修学支援体制と規則が整備され支援実績が多い広島大学の支援拠点アクセシビリティセンターと、学内の支援体制が整備されつつある山口大学の支援学生特別支援室では、継続的な事例の蓄積を行った。

文献資料調査と複数大学での現地調査をもとに、以下の3点に取り組んだ。

(1) 高等教育におけるアクセシビリティ支援に関するアクターの整理

支援に関わる要素として、障害に由来するニーズ、コーディネーター、支援者、支援機器や支援技術、支援関連規則、大学組織の構造等が想定できる。

日本学生支援機構の実態調査と支援事例集、現地調査を参考に、これらの要素を整理しつつ、支援の中でも特に課題が多いとされるものの一つである人的支援に関してアクターの洗い出しを行った。

(2) アクセシビリティ支援におけるアクター間の関係性への注目

障害学生支援現場での事例を参考に、特に人的支援について、支援コーディネート上の課題や、支援実施上のリスクに対してどのように解決方法を見出しているのかに焦点を当て、現地調査からアクターがいかにつながり合わされて支援実施に至るのかを整理した。

(3) アクセシビリティ支援におけるアクターと支援実効性に関する考察

複数大学の事例から、人的支援をコーディネートするにあたってのアクターの重要度と支援実効性の関係を検証した。これにより、人的支援を運用するためにポイントの一般化を図った。

4. 研究成果

本研究では、大学における障害学生へのアクセシビリティ支援の現場に注目し、支援に関わる要素をアクターととらえて、アクター間の関係を説明することで支援の仕組みを明らかにすることを目指した。

障害学生支援の中でも、特に人的支援について、広島大学の事例から支援者派遣の仕組みを紹介し、支援運用上のリスクをいかに克服しようとするのか対応を整理した。マンパワーに関わるリスク、支援の質のリスク、支援の負担のリスクについてそれぞれ検証したところ、マンパワーに関わるリスクが時間・場所・人数等の点で最も大きく対応が困難であることが明らかとなった。特にリアルタイムで特定の場所に支援者を派遣する際にはリスクが高いため、予めリスク対応を行っておく必要があった。

複数大学での現地調査と文献調査の結果を踏まえ、具体的なアクター間のつながりを議論するために、人的支援のなかでも全国的に支援実施例が多い、聞こえに不自由のある学生の情報保障であるノートテイクを例に、アクターのつながりについて整理した。授業

などの現場に支援者を派遣する場合は、特にコーディネーターにアクターが集中しており、コーディネート業務が様々な情報の集約と調整から成り立っている様子が見て取れる。コーディネートはアクターをつなげて支援を形成する行為と捉えることが出来るが、本来コーディネーターという人物が担うべきとされる役割も、情報が円滑に流れ、アクターが機能する仕組みが整えば必要なくなる可能性がある。

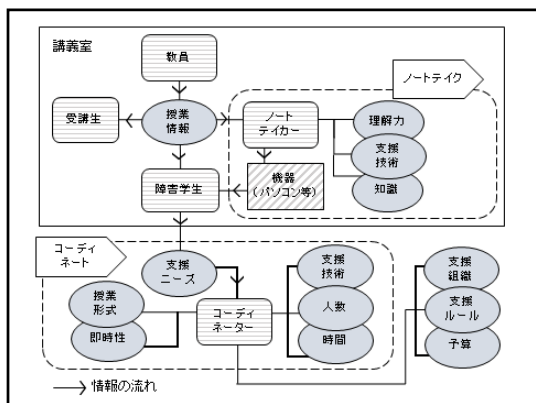


図. ノートテイク実施のアクター間の関係

さらにノートテイクの例をヒントに、支援に関わるアクターを「支援者」「知識」「支援技術」「支援機器」「負担」「時間」「場所」「予算」に絞って、授業中の人的支援の種類（点訳・墨訳、教材のテキストデータ化、教材の拡大、ガイドヘルプ、リーディングサービス、手話通訳、ノートテイク、パソコンテイク、ビデオ教材の字幕付け、チューター・TAの活用）ごとに、支援方法をコーディネートするにあたっての、アクターの重要度の目安を整理した。

重要度が高いほど、機能しなければ支援が成立しなくなる可能性が高く、支援を実施する際に考慮すべき点が多い。適切な支援のためには、支援の質を保ちながら支援の実効性のハードルを下げていくことが重要となるが、支援現場では、ICTの導入により支援技術のハードルを下げたり、支援コーディネートによって支援者の負担を調整するなど、支援の実効性可能性をあげる工夫が見られた。

本研究の意義について以下の3点を挙げる。

(1) アクターネットワークによる支援方法の見直し

本研究は、支援機器、ルール、時間といった要素を、コーディネーターや支援者等と同等にアクターとして取り上げ、関係性に注目することで、支援に関わる人の繋がりに着目して見えてくる支援の仕組みを分析する試みでもあった。

人に集中するアクターを人から切り離して考えた場合、そのアクターをいかに充実させたり効率的に組み合わせたりするのが改めて検討することができる。本研究では、一見、人に頼らざるを得ないと思われる支援

の方法を見直し、何が必要で何が実効可能なポイントなのかを検証することが可能であることを示した。

(2) 見落とされがちなアクターの重要性の指摘

従来、高等教育における障害学生支援で課題とされる支援体制、授業情報、支援スキル等に次いで、リアルタイムで実施する「時間」や支援を行う「場所」といったアクターに改めて焦点をあてた議論を行うことができた。

また、これらのアクターの繋がりや重要度を整理することで、支援の実効性に関して考察を加え、支援の一般化を図ろうとした。

(3) アクターの代替による支援現場での柔軟な対応

高等教育の障害学生支援現場では、要となるアクターの確保が難しい場合、別のアクターの代替利用が行われており、このことが柔軟な支援方法の形成に繋がっている。

例えば、人的支援におけるICTの導入や遠隔ノートテイク等の支援方法は「時間」「場所」「支援者」といったアクターにかかる支援上の重要度を軽くするものである。人的支援に関わらず相談対応業務においても、相談業務を担う人員が不足する場合は、新たに相談用スペース等の「場所」を確保してスムーズな対応を目指す工夫も見られた。

障害学生支援のアクターネットワークは、カリキュラム変更、支援体制の拡充、支援ニーズの多様化、ICTの導入等により、随時形を変えていくものである。本研究で取り上げたアクターについては、改めてその妥当性と関係性の検証、長期的な視点にたったアクターの重要性の再考が必要である。また、変化する障害学生支援のアクターネットワークに関しても考察が必要であり、これらを今後の課題としたい。

<参考文献等>

ブルーノ・ラトゥール、科学が作られているとき：人類学的考察、産業図書、1999
 日本学生支援機構、大学・短期大学、高等専門脱稿における障害学生の修学支援に関する実態調査報告書、2006 2015
 日本学生支援機構ホームページ
http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/index.html

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

岡田 菜穂子、小川 勤、田中 亜矢巳、濱本 けい、金子 博、障害等のある学生の相談対応にみる支援の現状と課題：山口大学の事例から、査読有、大学教育、14、2017、p41-47
岡田 菜穂子、小川 勤、田中 亜矢巳、金

子 博、宮田 浩文、障害のある学生への
人的支援と支援者育成：山口大学の取組、
査読有、大学教育、13、2016、p58-64
岡田 菜穂子、山本 幹雄、山崎 恵里、糸
井 真帆、佐野(藤田) 眞理子、吉原 正治、
高等教育におけるアクセシビリティ支援
アクターに関する一考察：人的支援を
中心に、査読有、総合保健科学、32 号、
2016、p47-55

山本 幹雄、岡田 菜穂子、坂本 晶子、山
崎 恵理、佐野(藤田) 眞理子、吉原 正治、
高等教育における合理的配慮のためのリ
ソース・シェアリングに関する考察、査
読有、総合保健科学、32 号、2016、p31-40
岡田菜穂子、山本幹雄、山崎恵里、山本
陽子、糸井真帆、佐野(藤田)眞理子、
吉原正治、大学教育における障害のある
学生のための支援者派遣とリスクマネジ
メント、総合保健科学、査読有、31 号、
2015、61-70

山本幹雄、岡田菜穂子、山崎恵里、山本
陽子、糸井真帆、坂本晶子、中野聡子、
佐野(藤田)眞理子、吉原正治、大学に
おける障害のある学生への合理的配慮と
その課題 - 広島大学の事例から -、査読
有、総合保健科学、31 号、2015、p49-59

〔学会発表〕(計 3 件)

小川勤、岡田菜穂子、障害者支援に関す
る地域リソース・シェアリングに関する
研究-UE-Net の概要と遠隔ノートテイク
実験-、大学教育研究フォーラム、京都大
学、京都府京都市、2017 年 3 月 20 日

小川勤、岡田菜穂子、差別解消法前後の
大学における障害学生支援の変化と課題
について、大学教育学会、立命館大学、
大阪府茨木市、2016 年 6 月 12 日

小川勤、岡田菜穂子、高等教育のユニバ
ーサル化を目指した FD・SD 研修会の在
り方について-差別解消法施行に向けた
学内支援体制の整備-、大学教育フォーラ
ム、京都大学、京都府京都市、2016 年 3
月 18 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 菜穂子 (OKADA, Nahoko)
(山本 菜穂子 YAMAMOTO, Nahoko)
山口大学・大学教育機構・講師
研究者番号：90547142

(2) 研究分担者

無し ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

無し ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

無し ()

研究者番号：